【書評】

奥野克巳著『一億年の森の思考法――人類学を真剣に受け取る』（教育評論社、2022 年 5 月）

佐藤考一

ボルネオ島は、日本列島の約 1.9 倍の 74 万平方キロあり、おおよそ 1800 万人の人が暮らしているといわれる（奥野, 2022：23）。このボルネオ島の一部である東マレーシアのサラワク州の研究は政治学でも文化人類学でも困難が多い。西マレーシア（マレーシア半島部）のように、どこへ行っても英語が通じ、マレー人・華人・「インド人」といった主要な 3 つのエスニック・グループを中心にした複合社会が成り立ち[1]、政治・経済・文化が営まれているというわけではないからだ。サラワクに住むエスニック・グループは多数あるが、先住民のグループの中には、熱帯雨林に住み、書き言葉がないか、あってもその形成が遅れていて、研究に必要な文献資料が十分にない場合が多々あるし、同じボルネオ島内で陸続きのインドネシア領のカリマンタンとサラワク州の間を往き来して生活しているグループもあるからである。

著者の奥野克巳氏は、そうした困難をものともしない、数少ない研究者の 1 人である。熱帯雨林の奥深くに踏み込み、先住民たちと家族のように暮らしながら、彼等の民族誌を克明にまとめていく、実践型の研究者としての姿勢には頭が下がる。本書では、ボルネオ島の熱帯雨林に暮らす 2 つの先住民を取り上げている。I 部では、インドネシア・西カリマンタン州の焼畑農耕民のカリスを扱い、II 部ではマレーシア・サラワク州の狩猟民のプナンを扱う。I 部の具体的な内容は、第 1 章「邪術廻戦、カリス異変」、第 2 章「シャーマニズム、生の全体性を取り戻す」、第 3 章「死者を送り、かたきを呪詛する」、第 4 章「旅する銀細工師、生の流動性」、となっている。II 部の具体的な内容は、第 5 章「ブルーノ・マンサー、共感と憤り」、第 6 章「ものを循環させ、何も持たないことの美学」、第 7 章「森の存在論、タワイとングルイン」、第 8 章「赤ん坊の肛門を舐め、アホ犬はペットになる」、第 9 章「生ある未来に向け、パースペクティヴを往還せよ」、である。どの章も先頭には漫画で、その章の重要なメッセージが示されていてわかりやすい。

いずれの章も非常に興味深いのだが、評者にとって特に印象に残ったのは第 4 章と、第 6 章、第 8 章であるので、それらについて簡単な紹介と若干のコメントを試みたい。第 4

[1] 主要な 3 つのエスニック・グループは、いずれもその内部は文化的に多様であることが指摘されている。マレー人、華人は複数のサブ・グループに分かれている。さらに、俗にいう「インド人」は、実は 1 つのエスニック・グループではない。その 90％程度は色の黒いインド南部出身者の子孫であるタミル人などであるが、残りの 10％程度は色の白いインド北部出身者の子孫であるベンガル人や、シク教徒などである（Kaur, 2001: 112-113）。

章では、サラワク州のイバンの女性たちが儀礼や舞踊の際に着用する銀の頭飾りの問題が取り上げられている。実は評者はこの頭飾りを 1999 年 8 月 18 日にサラワク州の州都クチン郊外で、イバンの舞踊を見学した際に実見している（写真 1）。その時には、写真を撮らせてもらい、「ああ、イバンの女性たちはこういうのをつけて踊るんだな」ぐらいの漠然とした印象しか持たなかった。だが奥野氏は、この頭飾りはイバンによってつくられたものではなく、サラワク在住の華人やイバンたちがムマローと呼ぶインドネシア領西カリマンタン州カプアス河の上流域に居住する焼畑稲作民たちの作品であることを突き止めたのである。しかもその歴史は 19 世紀までしか遡ることはできず、1970 年代にはムマローたちは銀細工づくりを止めていたという。さらに最近のものは、銀でなくアルミニウム製のものまであるという。文献資料の少ない先住民の銀細工の歴史を丁寧な聞き取りを重ねて明らかにしたところには、実践型の研究者としての奥野氏の面目躍如たるところが現れている。「実はこうだったのか、参ったな」というのが、評者の正直な感想であった。

（写真 1：評者撮影）

第 6 章では、サラワク州のブラガ川上流域に住む人口 500 人ほどの西プナンの集団に伝わるマレーグマ（写真 2：長い舌が特徴。シンガポール動物園で撮影）の神話から始まる、分かち合いの精神の話が紹介される。マレーグマには、尻尾が無い[2]。だが神話はこう伝える。マレーグマには元々は立派な尻尾がたくさん生えていた。しかし尻尾を欲しがる他の動物たちにマレーグマが惜しげなく尻尾を分け与えているうちに、尻尾が 1 本も無くなってしまった、と。このマレーグマの神話も、コミカルな漫画で章の先頭に掲示されている。漫画のマレーグマがとぼけた良い味を出している上、尻尾をもらいに来て並んでいる動物の中にヤマアラシまでいて、笑ってしまった。

[2] 厳密にいうとマレーグマには 3cm から 7 ㎝ほどの短い目立たない尻尾が 1 本だけある（Fitzgerald and Krausman, 2002: 1）。しかし、この尻尾は写真を撮っていても、なかなか確認はできない。

（写真 2：評者撮影）

この神話は要するに「ケチはダメ」というメッセージを伝えているのだが、奥野氏は、この社会規範が生来のものではないことも実験で確かめている。1 人の幼児に複数の飴玉を渡した所、もらった子は、最初はそれらを独り占めしようとし、母親に窘められて他の幼児に分け与えた。人間の性から見れば、当たり前だともいえるが、分け与える寛大な精神はしつけによって身につけられたものだったのである。そして、奥野氏は、プナンは個人所有を社会的に認めていないとまで言っている。他人に与えたものは、さらに他の人に渡る。ものは、循環するのだ。他人にものを分け与えて、質素に暮らす人はビッグマンと呼ばれ、尊敬されるという。そして、この「共有主義」に満ちたプナンの社会では、「知識」や「能力」も個人に属することはない。集団の中でシェアーされる。

競合と選抜の原理から成り立つ日本社会とは非常に対照的である。奥野氏はいう。「所有欲を認め、個人的な所有のアイデアを社会の隅々まで行き渡らせ、幸福の追求という理想の実現を、個人の内側に掻き立てるような私たちの社会。他方は、個人の独占欲を殺ぐことによって、物を皆でシェアーし、みなで一緒に生き残るという考え方とやり方を発達させてきたプナンの社会」（本書, p.182）、後者の方が、全ての人にとってやさしく組み立てられているように見えると。評者は大いに共感するのだが、問題は、開発が進むサラワク州の熱帯雨林で、人口 500 人ほどの小さな西プナンの集団のこのやさしい社会規範がいつまで生き残れるかであろう。奥野氏自身が第 5 章で述べているように、サラワクでは林業が盛んになり、開発を巡る様々な問題が、既に東プナンの人々には降りかかって来ているからである。

第 8 章は、犬に着目する。プナンの人たちは、人間の言葉を解する狩猟に長けた犬をよい犬とみなし、エサを与え大事にする。これに対して狩猟の役に立たない犬をアホ犬とみなし、エサを十分に与えず軽視する。ただ、アホ犬のなかで人間に気に入られて、ペット犬になったものもいるとされている。プナンの社会では、犬と人間の関係はこれで完結しているのだろう。

だが、かつてマレー半島部のオラン・アスリの社会では、犬には狩猟とは別の役割もあったとされている。それは、オラン・アスリのキャンプに近づいてくる虎を、いちはやく察知して吠えて人間に知らせることである（口蔵, 1996: 60-61）。ボルネオには虎も豹もいない（Shepherd and Shepherd, 2012: 80-82）[3]。いるのは、より小型の雲豹だけである[4]。だから、先住民と犬との関係は、虎や豹やヒグマなどの大型肉食獣の存在の有無で、また変わってくる可能性もあるのだといえるのではないか。

（写真 3：評者撮影）

以上で、本書の紹介と簡単なコメントを終わるが、最後に本書に沢山出てくる動物たちの中で、ヒゲイノシシについて、少しだけ触れておきたい。ヒゲイノシシは、恐らく本書の中で一番出現頻度の高い動物である。プナンの人々の重要な蛋白資源だからである。でも、どんな顔をしているのか。本書の読者の理解を助けるために、評者が昔、マレーシア国立動物園（Zoo Negara）で撮影した写真を掲げておく（写真 3）。この写真を見ていると、ヒゲイノシシが突然しゃべりだしそうな錯覚にとらわれないだろうか。奥野氏がいう、「プナンにとって、動物と人間の間にははっきりとした区別がない」（本書, p. 210）という考え方が、体感的になんとなく、理解できるような気がしてくる。この写真については、奥野氏と直接話したことがある。以前にプナンのヒゲイノシシ狩を扱った他の御高著（奥野,

[3] 奥野氏は本書で、プナンの口伝に「最初虎を捕まえて、それとともに狩猟をしていた」とあることを記している（本書, pp. 229-230）。この虎が何を指すのか、興味深い。本当に虎であるなら、プナンの先祖たちは、ボルネオ島外の虎の住む地域から移住してきた可能性も出てくる。また、虎ではなく、ネコ科の別の動物を指している可能性もある。ちなみにマレー語では、虎はハリマウ（harimau）（インドネシア側ではマチャン（macan）ともいう）、豹はハリマウ・ビンタン（harimau bintang、星柄の虎）、豹の黒変個体の黒豹はハリマウ・クンバンあるいはハリマウ・ヒタム（harimau kumbang、harimau hitam、いずれも黒い虎）、小型の雲豹はハリマウ・ダハン（harimau dahan、枝の上の虎）で、全てハリマウが付く。

[4] 注 3 参照。他に、（浅間, 2005: 66; 68）。

2011: 36）を頂いた時、この写真を葉書大にプリントし、裏にコメントを書いて、礼状として奥野氏に届けたのである。御本人から後で、「随分髭が生えてますね。こんなに髭が生えたヒゲイノシシは見たことがない」と言われた。評者は、「貴方がサラワクの現場でご覧になった方が、本当の状態だと思います。これは動物園で飼っているものなので、栄養状態が良く、髭も長いのでしょう」とお答えした覚えがある。

サラワクの先住民たちの生活を共感をもって真摯に追い続ける奥野氏のますますの研究の発展をお祈りしたい。熱帯雨林の精霊たちの加護のあらんことを。

〈参考文献〉

浅間茂（2005）『フィールドガイドボルネオ野生動物――オランウータンの森の紳士録』講談社。

奥野克巳（2011）『人と動物、駆け引きの民族誌』はる書房。

口蔵幸雄（1996）『吹矢と精霊』東京大学出版会。

Fitzgerald, Christopher S. and Paul R. Krausman (2002) “Helarctos malayanus”. *Mammalian Species*, 696, 1-5, http://www.jstor.org/stable/3504544.

Kaur, Amarjit (2001) *Historical Dictionary of Malaysia*, Kent: Scarecrow Press.

Shepherd, Chris R. and Loretta Ann Shepherd (2012) *Mammals of Southeast Asia*, Oxford: John Beaufoy Publishing.

（さとう・こういち　桜美林大学）

2022 年 7 月 27 日掲載決定